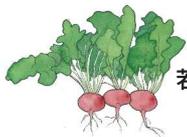


外出しなくなった若者を思う



若 者

猪 井 博 登*

Discussion about increasement of young ages staying indoors

Key Words : Opportunities of going outdoors, Capability Approach

私の研究している交通の分野では、高齢化の進展に伴い、高齢者の外出環境の整備が課題であると強調され、高齢者の外出を喚起する施策やその研究が行われている。取り組みの効果が表れたのか、いわゆるお元気高齢者が増えたのか、外出率の改善がみられ始めた。2010年に行われた第5回京阪神パーソントリップ調査の年代別の外出率を図-1に示す。この調査によると、70歳以上の男性で外出率は2000年に比べると2010年には向上している。一方、若者に目を向けると、休日の外出率が特に低下してきており、2000年と2010年を比較すると男性でも女性でも10%-20%減少している。また、その外出率自体も低く約50%となっており、半数の若者が休日は家の外に出ないという状態である。なお、平日は学校や会社などで外出するため、平日の外出率は高く、外出するかしないかを自由に決められる休日の外出率が大きく落ち込んでいる。このような数字に直面すると、高齢者の外出対策だけではなく、若者の外出対策が政策課題であったり、研究課題として着目していかなければならないと考えられる。

さて、若者が外出していない現状を是正する政策であったり、研究の必要性を述べた前提として、「外出しない状態は良い状態ではない。何らかの改善を行わなければならない」という意識が働いている。では、外出しないことは問題であろうか。外出をし

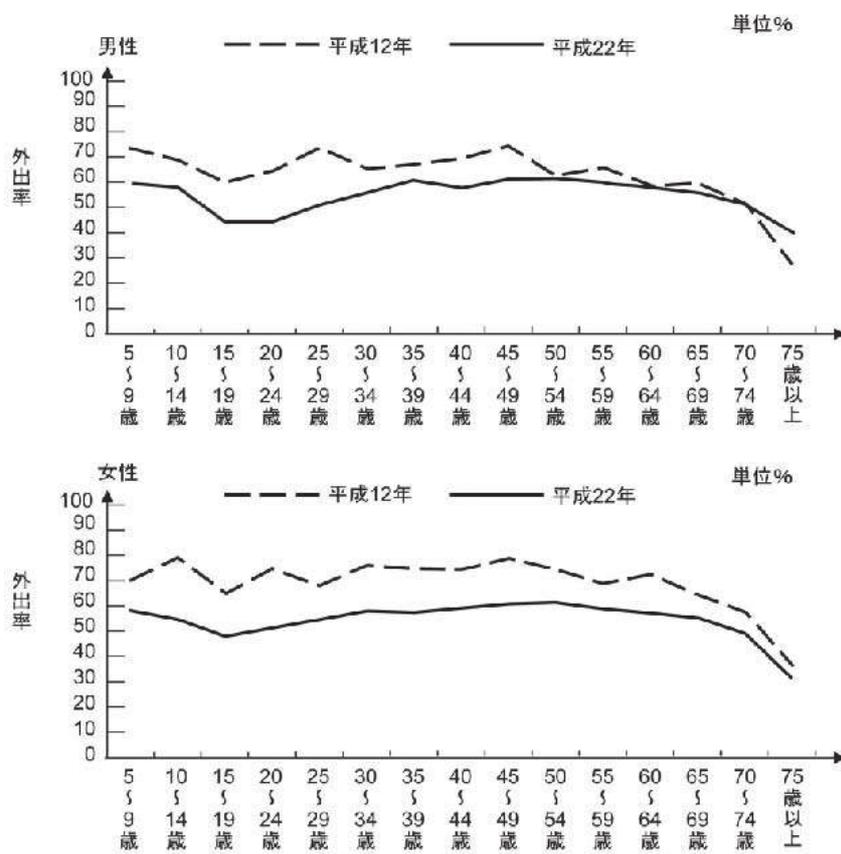
ないという事は、「家に閉じこもった暗い生活をしており、不幸せな状態」と判断してしまいがちである。しかし、内閣府の「国民生活に関する世論調査」では、2010年時点で20代男子の65.9%、20代女子の75.2%が現在の幸せに「満足している」と答えており、過半数が満足している状況である。調査対象が同じではなく、外出の可否が生活満足度すべてに直結するわけではないが、外出しなくなったからと言って不幸な生活を送っており、生活に不満がたまっている状況ではないようである。この点は、昔は外出しなければ達成できなかった日常生活物品の買いまわりやコミュニケーションも、ネットビジネスの発達やSNSなどの通信技術の発達などから、外出せずとも、用が満たせる状況がかなり整ってきていることから、推測することができる。また、外出しなくてもよい状況なのに、無理に外出させてしまっただけでは、それは本当に幸せなのだろうか。また、その人の意思が尊重されるべきと考えられる。このように、これまでの研究は、外出しているかという行動の「結果」や、行動から得られる「満足」で不足を発見し、政策や研究の必要性を指摘してきた。しかし、「結果」や「満足」だけでは、解釈できない問題が発生しているように思われる。「結果」「満足」という資料に加えて、そこで私は、「潜在能力」という資料が必要であると考え研究を行っている。なお、この「潜在能力」は、「行動」を興そうとしたときにそれを妨げるものがないという潜在的な能力を指す。外出で考えると、外出をしようと考えた際に、妨げるものがないかを調査、評価することとなる。理論は、厚生経済学者のアマルティア・センによって「Capability Approach (潜在能力アプローチ)」として提唱されており調査手法論、計画への反映方法などが研究課題となる。

しかし、「潜在能力」だけで政策を考えればよい



* Hiroto INOI

1976年11月生
大阪大学 工学部 土木工学科 (1999年)
大阪大学 大学院工学研究科土木工学専攻 博士後期課程短期取得退学 (2004年)
現在、大阪大学 大学院工学研究科地球総合工学専攻社会基盤工学部門 助教
博士(工学) 土木計画・交通計画
TEL : 06-6879-7610
FAX : 06-6879-7612
E-mail : inoi@civil.eng.osaka-u.ac.jp



資料：第5回近畿圏パーソントリップ調査

図-1 近畿圏における男女別年齢層別休日の外出率

わけではない。「結果」や「満足」にも着目し続けなければならない。妨げるものがない環境を作るだけでなく、実際にどのような行動につながっているのか、満足が得られているのかも政策を実施していく上で、重要な資料となる。外出で言うと、外出をすることで体を動かすこととなり、体を動かすことが健康につながるなどが考えられる。このような外出のもつ役割についての情報が伝わっていない人が居たとすると、個人の自由だからといって、外出しようと思わなくとも仕方がないというのは正しくない。妨げるものがない環境だけではなく、情報提供や外出を喚起する施策も必要となる。すなわち、これまでのように外出は必ず必要であると述べるだけでなく、なぜ必要なのか価値観を明確にし、述べていくことが必要となる。

このように、これまでの高齢者の外出に対する対策は、外出の障壁を除去するや新しい交通手段を整備するといった「かたち」の面のアプローチが中心

で、それを支える「しくみ」「こころ」の面のアプローチが行われてきた。高齢者となり身体的な能力の衰えが生じ「かたち」の面の不整合が大きくなるからである。一方、若者においては、外出の障壁となるような身体能力の衰えは考えにくく、おもに、「こころ」「しくみ」の面のアプローチが中心になり、「かたち」の面のアプローチは逆にこれを支える形でデザインされるようになる。このように、「こころ」の面のアプローチとなると、価値判断が入るなどこれまでとは異なった研究を展開できればと思う。

参考文献

土井 勉、安東 直紀、中矢 昌希、白水 靖郎、猪井 博登：若年者における生成原単位減少の背景について、土木計画学研究・講演集、Vol.51、2015。

内閣府：平成27年版 子供・若者白書